

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info@jase.or.jp URL http://www.jase.or.jp 発行人 松本清一 編集人 本橋道昭 © JASE. 2011 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。



| 「関西性教育研修セミナー2011夏」報告 1 | 「ありのままのわたしを生きる」ために⑧ |
|-----------------------------|----------------------|
| 「東京性教育研修セミナー2011夏」報告 ・・・・・5 | 今月のブックガイド |
| 北丸雄二のニューヨークリポート⑧ 8 | JASEインフォメーション ······ |

■「関西性教育研修セミナー 2011 夏 日報告

学校のなかの性的マイノリティ

――教育現場における排除と包摂 ――

9月4日は「世界性の健康デー」である。2011年のテーマは「若者の性の健康:権利と責任のわかちあい」。「世界性の健康デー」にあわせ、大阪で「学校のなかの性的マイノリティ」をテーマに、講演と事例報告が行われ、時を同じくして、横浜では、「愛とこれからの生と性~ちゃんと知っておきたい、オトコとオンナの事情~」をテーマにトークライブが開催された。

「関西性教育研修セミナー 2011 夏」の講演講師は、 宝塚大学看護学部の日高庸晴准教授、事例報告は、「ト ランスジェンダー生徒交流会」世話人の土肥いつき氏、 「"共生社会をつくる"セクシュアル・マイノリティ支 援全国ネットワーク」副代表の宇佐美翔子氏である。



主催者あいさつ

◆ 講演

若者の性的指向と健康問題:

学校保健で見落とされがちな視点について

..... 9

....10

日高氏は、厚生労働省エイズ対策研究事業など数多 くの調査・研究を行っている。それらの調査・研究に 基づき、教育・保健医療・メンタルヘルスに関する講 演をされた。

2005年8月~11月に厚生労働省の補助を受け、「ゲイ・バイセクシュアル男性対象のインターネット調査」が実施された。調査によると、ゲイ(同性愛の男性)とバイセクシュアル(両性を愛する男性)の約半数が学校でいじめに遭い、3人に2人は自殺を考え、14%は自殺未遂経験があるという。

この調査は、講師である日高庸晴宝塚大学看護学 部准教授が中心に行ったもので、5,731 人から回答を

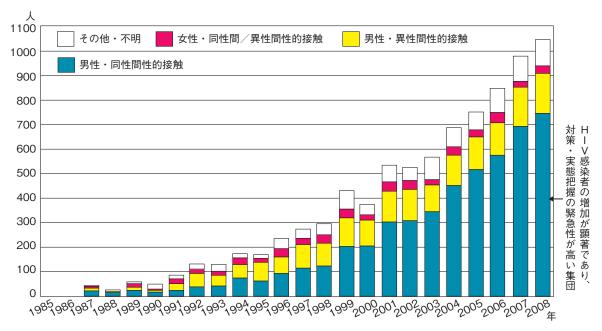


図1 日本国籍 HIV 感染者の年次推移(性別・感染経路別)

得た結果である。1999年から調査を始め、2003年、2005年、2007年、2009年の計5回で、2万人を超える方々が調査・研究に協力している。

最新の2008年7月18日~2009年1月6日に実施した調査結果の概要を最初に紹介し、そのデータをベースに、日高庸晴氏の講演要旨を報告することにする。この調査^{注)}の有効回答数は5,525件で、平均年齢は31.6歳、最終学歴は大学卒以上が56.2%、職業は正規雇用者が53.3%と最も多く、次いで学生16.9%、非正規雇用者10.8%となっている。

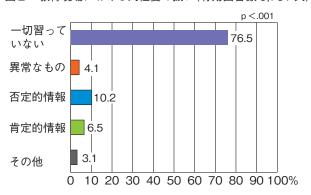
自認する性的指向は男性同性愛(ゲイ)68.1%、両性愛(バイセクシュアル)26.6%、その他・わからない・決めたくないが4.6%であった。

日高氏は、最初に、図1の「日本国籍 HIV 感染者の年次推移(性別・感染経路別)」(厚生労働省エイズ発生動向年報)を示された。感染経路を見ると、日本国籍の新規感染者の約70%が「男性・同性間性的接触(MSM)」であることがわかる。なかでも、若いMSM の感染者が約80%を占めているという。

この集団における HIV 感染者の増加が顕著であり、 対策・実態把握の緊急性が高い集団であることを、学 校教育関係者は認識していないし、また、その視点で HIV 予防教育がなされていないと日高氏は強い懸念 を語られた。

日高氏は「すべての人にとって、性の健康、HIV 予防に関する情報は必要ですが、病気の流行を考えた 場合、まずその病気が流行している集団で、その対策

図2 教育現場における同性愛の扱い(有効回答数 5,731 人)



をしない限り病気の発生はおさまらない」と述べ、予 防教育の視点とそのあり方に問題があると提起された。

学校で、異性間を対象にしたエイズ予防教育を受けた割合は49.6%である一方、男性同性間のそれは12.7%と低率であった。

学校教育での同性愛に関する情報の取り扱い状況についても、その現状は図2の通りで、「一切習っていない」76.5%、「異常なもの」4.1%、「否定的な情報」10.2%を合わせると全体の90%以上が不適切な対応をされている。

性的マイノリティへの偏見と差別が予防教育を阻害している日本の現状、世界の現状を例に挙げられた。なかでも 1998 年の米国ワイオミング州のゲイの大学生の殺人事件や 2005 年のイランの 10 代のゲイ男性絞首刑は、ショッキングである。

セクシュアル・マイノリティに対する偏見・差別や 暴力が、抑うつや不安傾向、慢性的な精神的ストレ ス、いじめ被害、自殺未遂など、多くの問題を生み出し、それが HIV 感染の予防を阻害しているという。

日高氏は、「性的指向を知らなければ支援できない のではなく、性的指向を言いやすくする環境をつくる 努力自体が、すでに支援である」と提言された。

学校現場での教育が、男女間を対象とした避妊と男女間での性交渉による HIV 予防教育のみであるならば、結果的に最も予防教育が必要な集団に属する性的マイノリティに対する教育は、皆無となる。そのことを教育現場の人たちに危機感をもって認識してほしいと締めくくられた。

【注】

平成 23 年度厚生労働省エイズ対策研究事業の一環として行われた、「インターネットによる MSM の HIV 感染予防に関する行動疫学研究」の調査レポートは、http://www.gay-report. ip/から概要を入手できます。

◆事例報告 1

トランスジェンダー生徒交流会からの発信

土肥いつき氏は、現役の高校教員として学校で人権教育に取り組むだけでなく、部落差別や在日朝鮮人差別、そして自らも性的マイノリティとして、さまざまな問題に取り組んでおられる。その活動の1つ「トランスジェンダー生徒交流会からの発信」の概要を報告する。

2006年から始まった交流会は、非常にシンプルである。昼の11時にJR新大阪駅の階段で待ち合わせ、近くの集会所に集まり、まず、昼ご飯を作り、ご飯を食べ、午後2時くらいになったら、「そろそろ自己紹介しようか」といって、自己紹介をするという。関西なので、当然「突っ込みあり」、一通り自己紹介が終わったら、また、2回目の自己紹介が始まるのだという。1時間半から2時間自己紹介し、それが終わると、「では後片付けしようか」となり、それで終わり。毎回毎回、同じプログラムなのだが、参加者は減らないという。

この生徒交流会の最大の特徴は、教員が一緒に参加 することにある。生徒を引率して参加するのだという。 それも出張扱いで参加するのである。そのことは、参 加する教員の学校では、教育の一環、教育の課題とし て認められていることになり、教員同士のネットワー



土肥いつき氏の事例報告

クづくりにもなっているという。

また、この交流会には、トランスジェンダーの生徒だけでなく、「他のマイノリティと出会う場でもあるのです。私たちの活動を被差別部落の青年たちがサポートしてくれています。交流会に参加するだけでなく集会所を無料で提供するなど、さまざまな支援もしてくれています。また、在日外国人や障がいをもつ人たちが参加してくれたこともあります」という。

この事例報告で、土肥氏は参加者の声を、手紙やビデオなどで紹介された。その中から参加した生徒の作文を紹介する。

「性同一性障害だけじゃなくて、いろいろな分野での差別やら常識やら普通とかが、勝手な観念で根づいていたりすることを知った。今までは教科書でしか知らんし、リアリティなかったことでも、実際当事者の声聞いて、自分(性同一性障害)のこと以外に少し目を向けれるようになれた。でもまだまだ自分のことで精一杯やったりするから、自分でちっぽけやなあって毎回痛感する。でもそれが逆に頑張ろうて気になれるから良い刺激になる。交流会はすげ一世界の広がる所やと思う。てか広げられた(笑)! |

土肥氏は、最後に水平社宣言を取り上げながら、「いまの状況は、マイノリティをいたわる状況だと思う。いたわるということは、下に見ている、かわいそうだから助けてやる。そういう運動がいかに自分たちを堕落させてきたか、ということを1922年の段階で水平社はいっています。私たち教員とか支援者というのは、子どもたちの前を掃き清めて、子どもたちが、こけんように、こけんように、としがちです。でも、それは違うと思います。子どもたちに適切なハードルを設定し、それを越えるトレーニングをすることで、子

どもたちが自分自身の力で立って、世の中のハードルを越える力を獲得する。少なくとも教員としての私は、それが役割だと思っています」と語り、その活動の一つが交流会だという。

◆事例報告2

セクシュアル・マイノリティ理解のために ~子どもたちの学校生活とこころを守る~

宇佐美翔子氏は「"共生社会をつくる" セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク(共生ネット)」の活動の現状と DVD 教材「セクシュアル・マイノリティ理解のために~子どもたちの学校生活とこころを守る~」について、その制作の目的と活用事例を紹介された。

最初に、共生ネットについて、次のように語られた。 「私たち " 共生社会をつくる" セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワークは、セクシュアル・マイノリティへの根強い偏見の解消と真の共生社会をめざして、国政レベルに働きかけようと、2008 年 1月に発足しました。当事者のみならず、その家族や友人などの支援者からなる全国ネットワークです。

2004年に施行された"性同一性障害者の性別の取扱いに関する特例法"以降、性同一性障害については一定の理解が進みました。しかし、その他の多くのセクシュアル・マイノリティについては、いまだに正確な情報・知識が行きわたっておらず、その性的指向や性別違和感ゆえに、家庭・学校・職場・地域などあらゆる生活の場で、依然として多くの誤解や偏見にさらされています。

実生活では、セクシュアル・マイノリティの多くは、この世の中をユニークな視点で捉え、さまざまな分野で社会に貢献しています。しかし一方で、身近な家族の理解さえ得られず、その悩みをどこにも相談できずに孤立する場合も多々あります。私たちは、人生のあらゆる局面でセクシュアル・マイノリティが抱える固有の生きづらさを言葉にし、国や自治体に適切な対応や公的支援を促すことで、セクシュアル・マイノリティのみならず、日本に暮らすすべての人々が安心して、自分らしく生きられる共生社会の実現をめざしています」

その活動の1つである学校での啓発教育、イベント



宇佐美翔子氏の事例報告

やシンポジウムなどの教材である「教師と親のための DVD」の内容を、実際に映写して紹介された。 その内容は次のような構成になっている。

【STEP 1 知る】図解「性」の多様性 セクシュアル・マイノリティを理解するための用 語解説

【STEP 2 聴く】学校生活とこころ 当事者の体験談、ある先生の教育実践、精神科医 による解説

【STEP 3 つながる】親と教師のための支援情報子どもとの接し方に悩んだときに活用できるリソースの紹介

この教材は、大学の授業にも使われているという。 大学で教育と臨床心理を学んでいる学生の感想をいく つか紹介された。

宇佐美氏は、活動の中で感じることは、「知らないことが、子どもたちを加害者にしてしまう可能性もあるので、知識として早い時期にセクシュアル・マイノリティについて学ぶ機会を子どもたちにもってほしいと強く思います。そのためには、まず先生たちが学んでくれないことには、生徒たちには伝わらない」と述べ、この教材を活用してほしいと締めくくられた。

事例報告の後、会場からの質問など、活発なディス カッションが行われた。

※当セミナーは、関西性教育研修セミナー実行委員会、 世界性の健康学会、大阪府立大学「子育て教育系キャ リア・コラボ育成」の主催、財団法人日本性教育協会 の協賛を受け開催されたものである。